

SSKO

NPO法人 共に歩む市民の会 会 報



2022年3月15日 発行

共に歩む市民の会広報委員会

横浜市旭区鶴ヶ峰 2-2-4

☎045-453-8386

<http://tomoni-people.net/>

『不安の正体』は自分が縛られている価値観

—差別意識は被害者の顔をする—

理事長 村岡 福藏

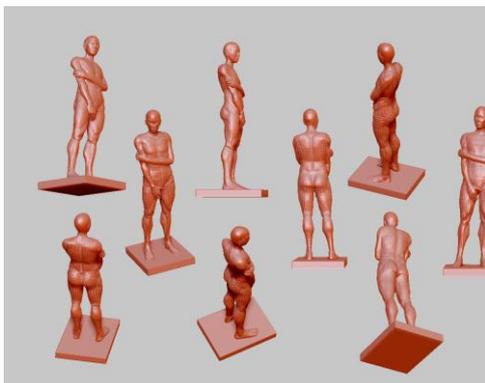
精神障害者を遠ざけてきた社会

『不安の正体』というドキュメンタリー映画が今、各地で上映されています。ご覧になった方も多いことと思います。横浜市都筑区や川崎市で建てられた精神障害の方たちが住むグループホームを巡る地域の反対運動を追っています。都筑区のホームの前には「運営反対」という幟（のぼり）が立ち並んでいます。

代表的な精神疾患である統合失調症は、100人に0.8人が発症するとても一般的な病気であるにも関わらず、ハンセン病と同様に隔離収容を中心とする国の医療政策や、かつての「精神分裂病」という名称などから、当事者は強い差別偏見の対象となってきました。日本の精神医学の礎を築いた呉秀三は、既に100年前に「わが邦十何万の精神病者はこの病を受けたるの不幸の他に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものというべし」と社会に警鐘を鳴らしました。イタリアでは、精神科医療の脱施設化を目指したバザリア法（法制定に奔走した精神科医の名前を冠して、そのように呼ばれます）が1978年に制定されています。一方、日本はというと、世界の精神科病院ベッド数の2割近くを今も日本が占めています。一般病床では、治療の必要がなくなれば速やかな退院が求められる一方で、精神科病院では約7万人もの人が長期にわたる「社会的入院」下に置かれています。日本社会は未だ、精神障害者を私たちの隣人として受け止められずにいます。

私自身、深い反省とともに思い出される一つの記憶があります。旭区役所職中、鶴ヶ峰駅から職場に向かう道すがら、「ほっとぽっと」で顔なじみの方が、こちらに向かって歩いてきました。「おはよう」と声をかけた私に返事はなく、「聞こえているはずなのに、どうして返事がないのだろう」と呑み込めない思いが残りました。後日、会議の席で、その方は「精神の人は不安に捕われ、うつむいて歩くので、挨拶に気づかないこともあることを知ってください」と自己紹介をしました。私は、自分の当事者への理解のなさに気づかされました。

差別意識は空気のように存在する



昨年のパラリンピック開会式で、車いすの和合由依さんの右腕は広げられ、左腕は膝の上に乗ったままでした。和合さんは堂々として、とても素敵でした。私は小児マヒの後遺症で右腕がとても細く、上げたり伸ばしたりが思うようにできません。子どもの頃はそれが恥ずかしくて、なるべく隠そうとしていました。自分自身が「普通ではない＝マイナス」という価値観に捕われていました。

私たちは好むと好まざるとに関わらず、社会の多数の人が共

有する価値観に大きな影響を受けます。その価値観の中に偏見が混じっていると、知らず知らずの内に自分の中にその偏見を刷り込んでしまいがちです。たとえ、それが人を傷つけるものであっても、気づくことは容易ではありません。当事者自身でさえ、その価値観に捕われてしまいがちです。

私は横浜市職員として、様々な被差別の当事者の方たちと出会う中で、「差別意識は空気のように存在する」ということを学びました。差別の原因は当事者の側にあるのではなく、社会の多数者の立場にいる人たちが共有する意識のありようの問題なのです。人はありのままがいい、自分を隠す必要はないんだ—私は解放されました。

差別意識は被害者の顔をする

一方で、私たちは様々な社会関係の中であって、自分の「立場」というのは常に相対的なものです。ある要素では少数者の立場であっても、別な要素では多数者の立場でいられることも多々あります。

私は被差別部落の方たちとの出会いの中で「同和対策室の人間だって、どこまで信用していいかわからない」と言われました。それは例えば、自分の子どもの交際相手が部落出身の人と分かった場合、どうするのかという問いかけです。私は心の中でシミュレーションを重ねます。親戚が反対したら？ 兄弟の結婚に影響することはないか？ そもそも、自分が部落出身者と見られてしまうのではないか？ 「いや、お父さんとお母さんは応援するから心配するな」—それが自分が出すべき答えだ。自分の中でそう得心するまでいくばくかの時間を要しました。それは、自分が差別される側に立たされたくないという私の中の差別的な自己防衛意識がもたらす葛藤のなせる技です。「困ったことになった」と考える意識自体が、実は差別に他なりません。普段は自分に差別意識があるなどと思うことがなくても、それが自分の問題になったと知ると、あたかも自分が被害者であるかのような転倒した心のメカニズムが働いていたのです。

「不安」の正体

神ではない私たち人間は、それまで自分の視野になかった存在に対して、最初から胸襟を開くことはできません。それ自体は差別とは言えないでしょう。一方で私たちは、自分が培ってきた価値観や考えのもと、未知の相手との関係において自分のポジションを判断しようとしています。

『不安の正体』では、グループホーム事業者が行った説明会で、反対する方たちが「精神障害者は何をするか分からない」「資産価値が下がる」などと強い口調で訴えています。そこには残念ながら、相手を知り、理解しようという姿勢は伝わってきません。伝わって来るのは、その存在が自分たちの生活の視野の中にあること自体がマイナスと考える、強い拒絶とコミュニティからの排除の意思です。



自分の特権を自覚せよ

では、なぜ拒絶や排除をする権利があるという考えに立つことができるのでしょうか。それは恐らく、ご自分たちが優越的な立場にあると考えておられるからでしょう。優生思想にもつながっていくものです。

人の固有の時間軸で考えるなら、私たちは誰かの手で育てられ、老いると誰かの介護が必要になり

ます。人生のその時間は多くの場合、地域コミュニティがその居場所となります。横浜市の身体障害者手帳所持者の7割は65歳以上の方で占められています。85歳以上では、4人に一人が認知症になると言われています。生涯を通じて病気や障害と無縁な人はいません。

今、アメリカの大学キャンパスでは「自分の特権を自覚せよ」という人権教育が取組まれています。白人に生まれたこと、大学に入ったこと自体が特権になっている社会構造に、その立場の人は気付くべきだという考え方です。

それになぞらえて私を棚卸しするなら、私は男性である、両親のもとに育てられた、両親は日本国籍だった、私は異性愛者である等々一様な要素で、この社会の中でマジョリティの立場に身を置くことができ、差別で傷つく人の存在に鈍感でした。様々な当事者との出会いが私の人としての人生をとて豊かなものにしてきています。

寛容で包摂的な社会が、私たちが願う社会の姿です。そのために、私は折に触れて自分の眼差しを振り返らなければなりません。

私はどちらの側に立っているのか？



広報よこはま旭区版3月号にほっとぽっとを紹介する特集が掲載されました。おかげさまで早速反響があり問い合わせも普段の倍以上来ている状態です。悩みや生きづらさを抱えている人はまだまだ大勢いると痛感しております。取り上げてくださった区に感謝しています。皆様もぜひご覧ください。

【令和3年度職員研修の実施】

令和3年度職員研修として令和3年10月19・20日の二日間、【「支援する」ことは「学ぶ」こと】というテーマで研修会を行いました。講師は当会の理事長、村岡 福藏氏でした。研修は横浜市入庁後長らく人権問題と取り組んできた村岡理事長ならではの内容でした。

例えば誰でも名前だけは知っている世界人権宣言ですが、それを自分流に読み解いてみるとどうであるかということ、人権の視点から見ると日本社会にはさまざまな課題が見えてくるということなど普段気づかないものの見方を教えてもらった気がします。

とても人気のある某テレビ局で放送している「ちこちゃんに叱られる」という番組の中でたびたび出てくる「すべての日本国民に問う」というフレーズは果たして正しいのか。日本国民以外の視聴者はそのフレーズで置いてけぼりにされていないかというようなことです。この場合、日本生まれではあるけれど国籍は外国である人たち、また長く日本に在住している外国の方たちのことも考えるならば「すべての視聴者に問う」で良いのではないかと、などという考え方です。

話題は「障害のある人たちを取り巻く地域・社会の現実」へと進み、決して忘れることのできない津久井やまゆり園事件から日本の優生思想、優生政策へと移りました。

そして「人権と人権を損なうもの」としてさまざまなハラスメントについて学びました。その中でも職場のハラスメントについてなぜ、これが大切なのかを改めて考える良い機会をいただいたような気がします。

また支援者としてどうあるべきか、どう関わっていくのかという点について「当事者主権」という言葉と共にあり方を考え、「さまざまなモノサシを持つ」ことの必要性を再認識いたしました。

【人権研修を終えて、職員の一言感想】

- ・改めて人権を意識し、職務にあたるのが大切だと肝に銘じました。
 - ・ほっとぼっと職員と法人理事が合同で、人権について考える機会が持てたこと、理事長の冷静な分析と、熱い想いを聞いたことはとても有意義でした。
 - ・支援を前向きにとらえてくれる方ばかりだといいいのですが、こちらの支援を拒否したり、素直に接して下さらない方もおり、日々葛藤があります。
 - ・人の話を聞くだけでなく、疑問に思っている事、納得いかない事を、意見交換できる機会があれば良いと思います。
 - ・当事者が自分の障害を受け止めていない、支援を前向きにとらえていない場合、支援を受けることに迷い抵抗があり、その心情を考えると辛い。
 - ・自立とは？個別性とは？当事者の意思決定・責任とは？支援観を問われる気がします。
- 長い間、障害者、マイノリティが受けて来た辛い歴史言葉に心の耳を傾けることが必要だと思います。
- ・今回の研修は今一度立ち止まって様々な角度から人権について考えたり自分を振り返ったりする機会となり有意義な時間でした。
 - ・忙しさに流されている日々ですが、空気のように存在する差別意識などに「あれっ？」と引っかかるよう自分自身の感度を上げていけるよう努めたいです。

【旭区精神保健福祉セミナー配信中です】

障害当事者の方や横浜FC等の支援者の方に『精神障害を抱える方が、障害者スポーツを通じて、どのように自身が望む生き方を実現したのか（＝リカバリー）』をテーマにお話いただいています。

配信期間（YouTube 配信） 令和4年2月14日（月）10時～令和4年4月13日（水）15時
視聴方法（申込み不要・参加無料） 共に歩む市民の会ホームページ（<http://tomoni-people.net>）よりアクセスください。

主催：旭区役所 / 旭区生活支援センターほっとぼっと

【旭区ムーブメント】

「コロナ禍で・・・」そんな言葉を日常的に使うようになってもう2年になります。生活に問題を抱える人も日に日に多くなっていっている、そんな風にも思えます。

昨年3月、万騎が原地区で行われたのを皮切りに、旭区内ではほぼ毎月のように「日用品、食料品等の無料頒布会」「暮らし応援会と相談会」が開かれています。

コロナになって生活が苦しくなってしまった方々、人との繋がりがなくなってしまう方々への一助になればという事で始まった活動です。

社会の中で孤独を感じ、疎外感を抱く方々に少しでも寄り添えたらという気持ちは市民の会にも通じるものですね。「困ったときはお互い様」の気持ちを大事にしていきたいと思います。



【会員からのお知らせ】

市民の会の会員であり、ピア活動を積極的に行ってきた和田公一、千珠子さんご夫婦の一人娘である和田美珠さん（本宿中学3年）が全国中学生人権作文コンテストで奨励賞をもらいましたのでここに報告いたします。当事者であるご両親のことを交えて書かれたとても素晴らしい文章です。今回は全文を掲載いたしました。

詳しくは法務省第40回全国中学生人権作文コンテストをご覧ください。

また同作品は横浜市大会では最優秀賞の一つである「横浜市人権擁護委員会賞」を神奈川県では最優秀賞を受賞していることを合わせてご報告いたします。

誰もが理解しあえる社会とは

横浜市立本宿中学校3年 和田 美珠

病気を隠す。ある一般的な考えです。他人に迷惑をかけないように、自分の病気を隠す。これは正しいことなのでしょうか？

わたくしの両親は精神障害者です。健康な人とは少し違います。私は、幼いころから親の病気を知っていました。我が家の教育方針が病気を隠さないという事だったからです。父の症状は、今来た道に戻ったり、嫌な数字を見てしまうと、お風呂に入り直すなど少し理解しがたい病気です。そして母は、症状が出てしまうと、何も考えられなくなり動けなくなる。夕飯などが全く作れなくなります。その中で、生活してきた私は症状が出る親と街を歩くと、大人の冷たくて痛い視線がとても嫌でした。出来るだけ友達と会いたく無かったです。でも、そんな親が居るからこそ学ぶこともあります。それは精神障害者だろうが、無かろうが幸せに暮らせるし、あまり障害を持っていない人と変わらないという事です。大変なことはもちろんあるし、私だって、両親の障害を理解しにくい事もあります。しかし、小さいころから病気のことを伝えてくれたからこそ、症状が出る時の対処法が分かります。障害のある両親だけど、いろいろな家族の幸せのカタチがあるように、我が家の幸せのカタチがあります。

障害を隠さないで生きる。今の精神障害者の人々はそれがとても難しい事らしい。私も前、引越することになった時、両親が「精神障害者です。」と言うと、すぐ断られてしまった事があります。両親が受けている相談の中にも「子どもに病気の事を隠した方が良いですね？」という相談が来ます。私は病気の事を隠されて来なかったからこそ、「そういう家庭もあるんだなあ。」と考えさせられます。

今の社会は、精神障害者に対してのイメージがとても悪いと思います。すぐ暴れるのでは無いか？人を殺すのでは無いか？何も知ろうとしない人がそうやって、自分とは違う人に対して固定観念を持ってしまう。これが本当に障害者が生きやすい世の中なのでしょうか？何故、精神障害者だと人を殺すと思うのでしょうか。この病気を持って居ない人でも、人を殺す人だって居るはず。精神障害者だろうが無かろうが、良い人だって悪い人だって居ると思います。精神障害者に対して悪いイメージを持つ人が多いからこそ、隠さなければいけないと思う人が多いのだと思います。本当にこれが、誰もが生きやすい世の中なのでしょうか？結局は、自分が良ければ良いという考えになってはいませんか？

私は思います。大切な事は、伝えていくという事です。精神障害についてもっと伝えていくべきだと思います。身体に障害のある人とは違い、精神障害者は目に見える障害では無い為、助けを求めづらい。だから、もっと伝えていって、理解してもらう事が大切です。そうしていくことで、精神障害者が肩身を狭くして生きることが、少しでも減るのでは無いかと思います。色々な人が居るし、色々な意見があると思います。でも、それは良い事です。しかし、一概に精神障害者の全員が全員悪い人だと決めつけないでほしいです。そして、精神障害者が自分の病気を隠さずに、自分らしく生きられる社会になってほしいと思います。その為に私は、この両親の元に産まれたからこそ、これからも伝えていきたいと思っています。

第83回理事会報告

日時： 2月24日（木）18：30～21：00 場所： ほっとぽっと別館
出席者： 理事：8名 職員1名

<報告事項>

- ① 令和3年度決算見込みについて
- ② 旭区生活支援センターほっとぽっと移転について
- ③ グループホーム物件について

<審議事項>

- ① 通常総会の開催について
- ② 令和4年度「ほっとぽっと」事業計画について
- ③ 常勤職員就業規則の改定について
- ④ 常勤職員給与規定の改定について
- ⑤ 虐待等適正化委員会設置運営規定の制定について
- ⑥ ハラスメントの防止に関する規定の制定について
- ⑦ 役員人事について

2022年3月～2022年7月 市民の会・ほっとぽっと スケジュール

★ぴあくらぶのつどい 3月15日 4月19日 5月17日

★お花見散歩 3月29日（コロナの状況を見て開催）

☆ほっとぽっとからのお知らせ

- ・自動検温機を玄関に設置しました
- ・広報よこはま旭区版にほっとぽっとの特集が掲載されました
- ・地域自立支援協議会 精神連絡会 3月16日

☆共に歩む市民の会第18回通常総会 6月4日

（開催方式はコロナの感染状況を見て決定）

※常日頃からの法人へのご協力を感謝いたします。

11月から2月までに寄付をいただいた方（敬称略）

金品寄付： 富永久雄

物品寄付： 瀬崎忠雄

日本ケンタッキー・フライド・チキン(株)



編集後記：令和3年度が間もなく終わります。今年度もコロナ、コロナに振り回される一年でした。

さはさりながら、コロナ後を見据えて計画を立て動き続けることも忘れてはいけません。今こそ新規事業に夢を馳せませんか。例えばグループホームの名前やコロナが明けたらやりたい事など、いいアイデアがあったら募集しています（國井）

〒241-0022 横浜市旭区鶴ヶ峰 2-2-4

NPO法人共に歩む市民の会 広報委員会

定価 50円

低料第三種郵便物の認可を受け、SSKO（副題 NPO法人共に歩む市民の会会報）として発刊します。

発行人

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷 3-1-17

ヴェルドゥーラ祖師谷 102

特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会